

8thの息子の学校生活(前編)

今年の春は、ヒューストンでも他の地域でも、異動が多いなと感じています。ヒューストンを去る方がいるということは、ヒューストンに新しく来る方も多くいるということでしょう。そして、その中には海外生活が初めての方も少なくはないと思います。今はインターネットが普及し、SNSでも多くの海外の生活情報が手に入ります。しかし、実際の生活については正直なところ分かりません。その地に入らないとわからない事が多くあると思います。その一つが【言語】の事ではないでしょうか。子供達の言語習得について、私の息子の事を書いてみたいと思います。

低学年から高学年になる時に環境の変化が大きかった息子。実際に本当に苦労しました。「子供なら、海外に行けば自然に喋れるようになるでしょ？」と思っている方が多いと思いますが、そんな事はありません。幼稚園児くらいまでならばそれは当てはまるかと思いますが、年齢が上がるほど大変になる事は確実です。そんな息子の経験談をお話します。

息子は現在13歳。5歳から6歳までの1年間はシンガポール、7歳から9歳まではアメリカのカリフォルニア、そして9歳から今現在はヒューストンで暮らしています。こう、経歴だけ見ると、「お？息子君も英語は大丈夫でしょう」と思うかも知れないですが、答えは「ノー」です。今でこそ、問題なく現地校の授業は受けられています。そうなったのもここ2年くらいです。

シンガポールでの生活は1年という短さ。やっと英語を喋り始めた頃に日本に帰国。英語は秒で忘れました。その1年後、再び渡米(2ndの新学期スタート2週間後)。カリフォルニアという場所柄、同じクラスに日本語を話せる子は3人。授業中のサポートをしてくれたりしましたが、授業以外の休み時間、昼食、放課後は全て日本語。ここでもっと英語漬けにしておけば良かったのかも知れないですが、もう自我ができ始めており、学校に慣れる事を優先しました。息子は運動が苦手だったので、スポーツを通して学ぶのもダメ。慣れてくると次は英語を話す事に対する恥ずかしさが出てきたのです。日本人のクラスメイトがいるのは良いのですが、ある時3rdでも同じクラスになった子に授業中に質問したところ、「自分で考えて！」と言われた出来事がありました。そこで自分で考え英語で発言したものの、「英語が間違っている。そうじゃない」と言われてしまったそうです。その一件から、完全に英語に対する自信を無くしてしまいました。わかっているけれど自信がないので喋らない。その悪循環で3rdを終えます。

そして、ヒューストンでの新生活(4thの11月から)。もう、暗黒期です。実はカリフォルニアからヒューストンに引っ越しする間、VISAの関係で2ヶ月間日本の小学校に通っていました。息子にとってはとても楽しかったようで、楽しいのに又、引っ越しをしなければならぬ。どうしてまたアメリカに行かなきゃいけないの？という不安定な精神状態と反抗期が重なった時期での渡米でした。ヒューストンの小学校に行き出してから、学校を休む事が多くなってきました。テキサスの決まりなのか、病気以外の理由な

き欠席は問題視されます。日本のように登校拒否で長く学校に行かないという事はできません。病気の場合には医師の証明書が必要です。証明書が無い欠席が続いたので学校からどうしたのか、との問い合わせがありました。まず、親の私達がしたのは、担任の先生に相談することです。当時はコロナの前だったので夫婦で学校に出向き(こういう場合は必ず両親揃って行った方が良いでしょう)、息

子の担任と顔を見て話しました。先生達も色々案を出してくださり試してみましたが、改善せず。次にスクールカウンセラーにコンタクトを取りました。校長先生、カウンセラー、担任、ESL担任で話し合いです。校長先生はまず息子に「あなたは学校に来なきゃ駄目だ。学校に来なければ私達はあなたに何もしてあげられない。学校に来たら私達は最大限あなたをサポートするから！」とかなり厳しい口調で息子に話していました。しかし、その話し合いの後でも学校に行けず。数日行って、休む。遅刻していく。そういう事が続きました。行けない理由は「自信を無くしてしまった」事のようなのでした。仲良く話をするようになった子に「僕たち友達だよね？」と聞いたら、「maybe」と返ってきたようで、それが何よりもショックだったようです。

それまでに、何度も家族で話し合いました。しかし、「日本に帰りたい」の一点張りの息子。夜中に思いついたように大泣きし、「帰りたい」と訴えていま

た。でも、私達は駐在ではなく、現地採用の為それなりの覚悟を持って渡米しています。日本に帰っても仕事は無い。でも、子供にとってはそんな事は関係ありません。息子もその事は充分に理解しているけれど、どうしても父親のせいで自分の人生はこんなにも辛いのだ、と、毎日のように父親を責めていました。そして、仕方がない、子供達と私は帰国しようということに決めたのです。退学届まで出しました。けれど、私が諦めきれなかった。涙が止まらないのです。私自身も希望や夢を持って覚悟してきた。息子にももう少し頑張ってもらいたい。けれど、今までの生活を見ていたらもう十分に頑張った。その葛藤で涙が止まらない。そんな私を見て、息子が「もう少し、頑張ってみようかな」とボソッと呟きました。

次の日。退学届を出していたため担任から呼び出しを受け、家族全員で学校に行きました。「(息子が)もう一回頑張ってみるって」と伝えたところ、担任の先生は満面の笑顔で「わかった！」と言ってくれました。オフィスにも行き、スタッフに退学届を取り下げてもらおうように伝えると、笑顔で「じゃあ、これはもう必要ないわね！」と私達の目の前で書類を破ってくれました。ドラマのようでした(笑)そこから少しずつ、行けるようになっていきました。

当時ポケモンカードが流行っていたので惜しみなく買い与え、ご褒美と称しては寿司を食べさせ。私達も親として色々試行錯誤していました。その後、すぐにコロナでロックダウンに入り、息子に再度変化が訪れます。次月号の後編では、コロナ禍以降の経験についてお話します。

(編集委員)

